

〈死からの視線〉を作る

特異な〈アトリエ〉を起こす
環境 = 装置としての都市

山本浩貴 (いぬのせなか座)

小説家 / デザイナー / 批評家 / 編集者…

0-a. 自己紹介

山本浩貴 (やまもと・ひろき)

1992年生まれ。小説や詩やパフォーマンス作品の制作、
書物・印刷物のデザインや企画・編集、芸術全般の批評。

2015年より制作集団・出版版元「いぬのせなか座」主宰

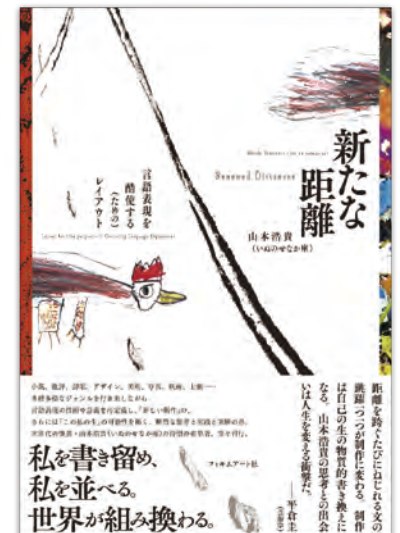
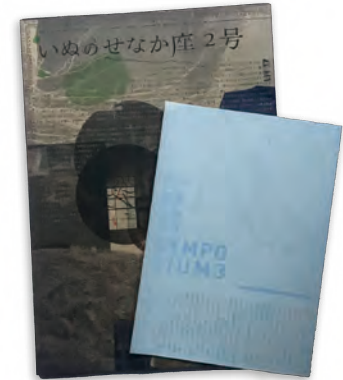
2022年まで文芸誌「早稲田文学」編集

「クイック・ジャパン」アートディレクター (159-167号)

小説「無断と土」(鈴木一平と共著、『異常論文』『ベストSF2022』収録)

批評『新たな距離——言語表現を酷使用する(ための)レイアウト』
(フィルムアート社)

- 小説家
- デザイナー
- 批評家
- 編集者



0-b. もくじ / 概要

03 / 29

①都市と〈世界視線〉

…〈世界視線〉の内実を
要約・概観

③非視覚的なイメージ

…表現の核としての像

⑤〈死からの視線〉をつくる

…ワークショップへ

②〈死からの視線〉

…〈世界視線〉の由来をたどる
柳田国男、宮沢賢治、
既視、死

④手前側の生への接続

…〈アトリエ〉から考える

詩人・批評家の吉本隆明が都市をめぐり展開した〈世界視線〉について、その内実と由来を再検討することで、今も使える概念＝経験ツールを設計する。
→さらにそれを、山本が近年検討している〈アトリエ〉の問題として考えることでより使い勝手をよくし、そのさきでワークショップ課題を組み立てる。

都市と〈世界視線〉

1

多重的空間をめぐる視線／像

1-a. 吉本隆明(1924-2012)

●言語表現(詩)の実作と、政治・文芸・宗教・経済・サブカルチャーなど様々な分野の批評で活躍。著書多数。

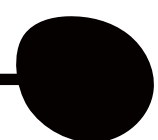
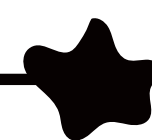
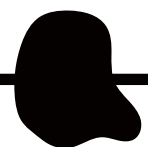
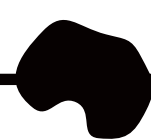
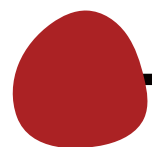
●『ハイ・イメージ論』(1985-1994)

都市論ないし高度資本主義論として始められ、しかしファッション、音楽、地図、舞踏、映画、哲学、経済学、文学などさまざまなジャンルを経巡り展開される著作。

→そこで主要概念として提示されたのが〈世界視線〉。

人工衛星画像や当時最新だったコンピューター・グラフィックスなどを参照しつつ、都市における「イメージ」を、

「上方からの視線」=〈世界視線〉と人間の視線の高さ=〈普遍視線〉の織り合わせとして検討していく。



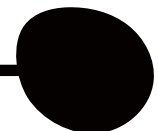
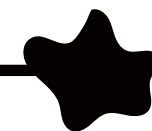
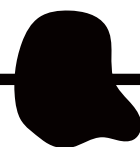
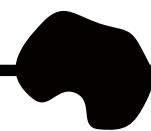
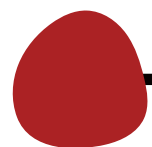
1-b. 〈世界視線〉の再検討

- 『ハイ・イメージ論』は、奇妙な都市論として、あるいは吉本の著名な概念〈共同幻想〉の発展形として、少なくない論者が検討してきた。

→ただ、同書の核は、「イメージの表現として文学を考えることでその他の表現形式と地続きに検討する」ことにあった。

- 今回のレクチャーでは、〈世界視線〉の背後にある文脈等を辿ることで、都市論というよりあくまで言語表現をめぐるものとしてそれらがあったことを明確にする。

→さらにその先で、**都市を、表現と環境をめぐる特異な装置のひとつとして捉え直す手立ての形成**を目指す。



1-c. 〈世界視線〉の内的構成

●〈世界視線〉とは……

→臨死体験における幽体離脱と、人工衛星画像、
そしてコンピュータ・グラフィックスが重なりあって
形作られた、《想像上のイデアルな視線》

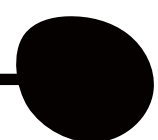
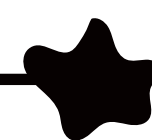
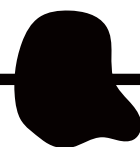
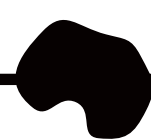
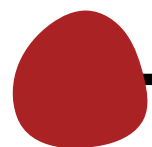
●ある対象をあらゆるところから見つめ俯瞰する視線

(対象とそれを見つめる主体の組み合わせの「総体」を総和した視線)

●ある瞬間のそれはもちろん、歴史的変化も含む

●その視線にとって、都市に生きる人々は虚像である

(衛星画像では個々のひとはすべて潰れ、虫や鳥などと同じく想像上のものになる)



1-d. 都市をめぐる4つの分類

●上方から俯瞰する〈世界視線〉と、下方から見上げる〈逆世界視線〉、人間の肉体にあわせた〈普遍視線〉の3種類が、様々に行き交いながら、都市の像をかたちづくっているとされる。

a. 広場(あるいは原っぱ)・公園・緑地

b. 民家地域(あるいは人工的な高層マンション地域)

いずれも〈(逆)世界視線〉と〈普遍視線〉が交錯する場所

人工的につくられたものには〈世界視線〉が、空き地などは〈逆世界視線〉がある。

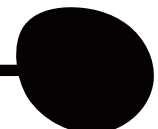
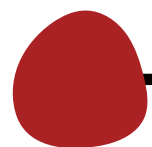
単純な高層マンションは、〈逆世界視線〉をただそのまま〈世界視線〉に《返還》しただけだという。

c. 場所X

古い類型の都市に、高度の人工都市が《空間的に接ぎ合わされ》、重なり合うことで生じる場所

d. 異化領域

相互包摂において特異な映像を作り出す。異なる段階の土地が同じ場所に多重的に折り重なる



1-e. 閉鎖空間と入れ子

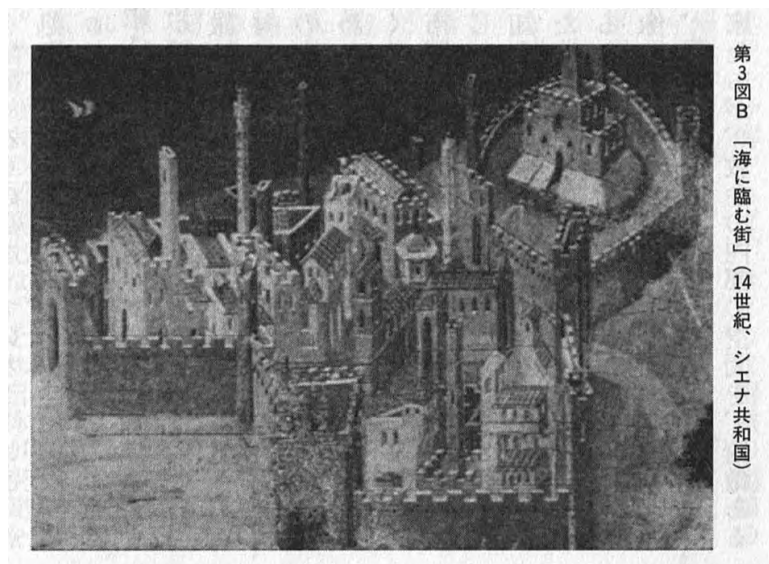
●『ブレードランナー』における「高次元映像」

単一の〈世界視線〉による俯瞰を遮断したうえで、複数の空間を折り重ねていくことで、高次元のイメージを立ち上げているという

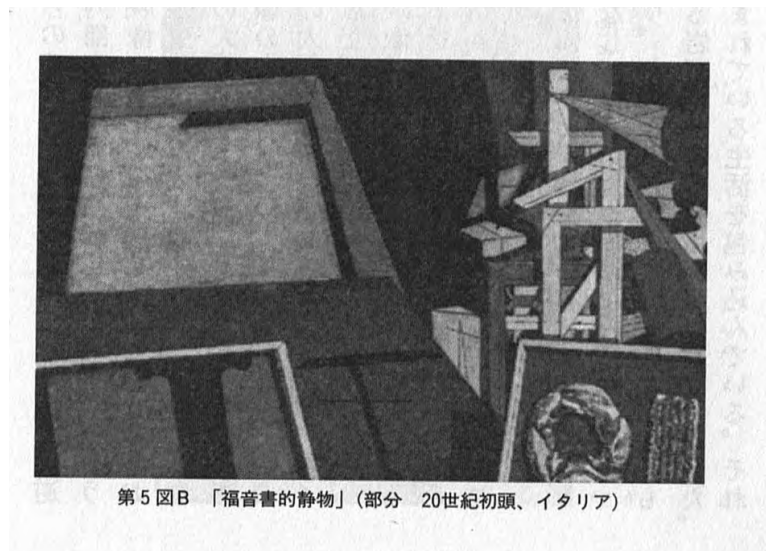
●複数の視点を地続きに混在させるように描かれた宗教画

●ジョルジョ・デ・キリコ

●都市における事例(偶発的コラージュ)



第3図B 「海に臨む街」(14世紀 シエナ共和国)

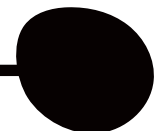
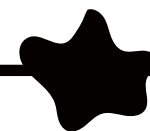
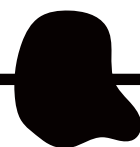
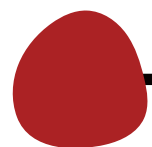


第5図B 「福音書の静物」(部分 20世紀初頭、イタリア)



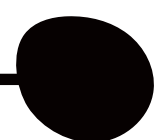
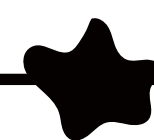
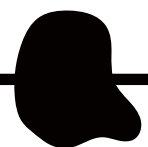
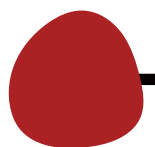
第5図A コラージュされた景観(現在、東京)

都市と〈世界視線〉



1-f. 〈世界視線〉の特徴整理

- 今ここにいる私を上方から俯瞰する視線
- 「高度機械化」から「高度情報化」へ
- 歴史的推移を把握する視点
→世界の操作可能性、一挙性
- 〈逆世界視線〉……「自然」と「科学」の対応関係
- 《〈死〉から照射される視線》……この私との距離
- 〈世界視線〉の複数性／多重化可能性……その先で生じる「^{イメージ}像」
→これらが重なる場所としての〈世界視線〉、とは結局なに？
⇒由来をたどることにより明確になるはず



〈死からの視線〉

2

(自然)法、既視、科学、死

2-a. 〈世界視線〉の由来

①柳田國男論

……1980年代後半の吉本は、柳田國男をめぐるテキストを多く著している。

そこでは〈世界視線〉の発送のもとに柳田の方法論があったとされている。

②既視

……「柳田國男論」で重視される「既視」の質感は、〈世界視線〉の重要な構成要素であると同時に、

『ハイ・イメージ論』の前段階と言える『マス・イメージ論』(1984)の「推理論」で、

特異な言語表現における現象として論じられている。

③宮沢賢治論

……「推理論」で関連事例として挙げられる宮沢賢治の作品は、吉本が〈世界視線〉的事態を検討した

最初の対象である。宮沢において〈世界視線〉は宗教的かつ科学的な救済に関わる。

④死

……『死の位相学』(1985)や『未来の親鸞』(1990)など、1980年代半ばから1990年代初めごろに

かけての吉本は、死を積極的テーマとしていた。〈世界視線〉はその延長線上に構成されている。

〈死からの視線〉



2-b.①柳田國男と俯瞰

- 講演「共同幻想の時間と空間」(1986)

……柳田の民俗学的方法論が〈世界視線〉のベースとなっていると説明

- 「柳田国男論」(1984-1987)

「常民」なるプレーンな人体が「(自然)法」ないし「習俗」を装填されることで、その反映として生き、あるいは死んでいくなか、柳田は「旅人」として複数の土地を渡り歩くことで、複数の習俗を貫通する視点を「**上方からの俯瞰の視線**」として得、それが「文体」へと反映される。

その「文体」に触れた者は「**既視**」めく感覚に陥るという。

2-c.②既視とテキスト

- 『マス・イメージ論』(1984)の「推理論」で、「既視」は〈推理〉という行為／ジャンルの核にあるものとして語られていた。
- 《〈まだわからないところにいるのに、既にわかっている〉》
 - 《〈見えるはずがないところにいるのに、じぶんを含めたその光景が見えるところにいる〉》
 - エドガー・アラン・ポオの作品における俯瞰と既視
 - さらに宮沢賢治『銀河鉄道の夜』が例として挙げられる

2-d.③宮沢賢治と科学・宗教

- 宮沢賢治は吉本にとって特権的な作家のひとり
→1976年の時点で〈世界視線〉的事象を抽出している

※『共同幻想論』で柳田国男を論じる際にも宮沢賢治を伴い、
「柳田国男論」でも宮沢賢治との対比を唐突に示している。

- 離人症めく遠い場所の時間から、今ここに向けて降る視線が
歴史を一挙に概観してしまう。
→吉本はここに、**大乘仏教**の救済と**科学的知**による世界把握の
宮沢における重なりを見る。

ほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまれば
もう信仰も化学と同じやうになる。

〈死からの視線〉



2-e.④死と距離

- 吉本が宮沢に見るような、遠くからの一挙的は、同じく吉本が重視する存在である親鸞をめぐる議論のなかで〈死〉からの視線として展開されもする。
- さらに同時期の『死の位相学』でも臨死体験における幽体離脱的経験に強い関心があてられ、その先で『ハイ・イメージ論』がやはり幽体離脱の経験をめぐる記述から始められることになる。
- 〈死〉とは……
私の二重化、別の場所から距離を隔てて今ここを見つめる視点の知覚であるとともに、ある法則性のもとすべてが先んじて計算され記述され尽くす事態をも示している。 →柳田論での「悲劇」「(自然)法」の問題

〈死からの視線〉

2-f. 〈世界視線〉の由来はどこに？

17/29

- 都市の姿そのものから導き出されたものではおそらくない。
例えば科学技術や資本主義の高度化のほうにこそ、由来がある。

※「人工知能民主主義」(東浩紀)

- さらに踏み込めば、吉本において最も重要なのは、ここまで見てきたような〈世界視線〉＝〈死からの視線〉がもたらす(それにより構成される)「イメージ」だろう。それは単なる視覚像ではない……

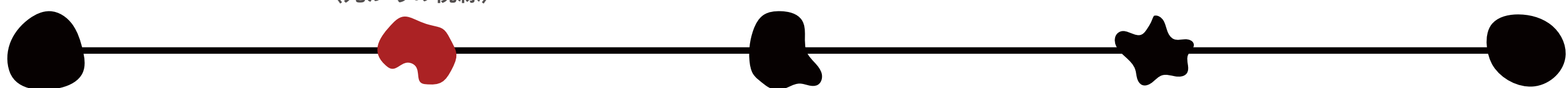
→ノン・グラフィック(非視覚的)なイメージ

- 文学における《ノン・グラフィックな^{イメージ}像》をめぐる問い

→空間の入れ子への注目も言語表現をもとに発想されている

※都市・世界の宮沢賢治化

〈死からの視線〉



非視覚的なイメージ

3

表現の核としての〈死からの視線〉

3-a. パラ・イメージと死

- 《イメージの表現として文学を考える》ことが『ハイ・イメージ論』の発端としてあった。そこで表現全般は束ねられ、総合される。
→それが明確にあらわれるのが「パラ・イメージ論」から「視線論」まで。
ここが『ハイ・イメージ論』のピークとも言える。
- テキストから図を描くとはどういうことか？という問い
→意味や概念に還元できない^{イメージ}像の発生を、
オルト→メタ→パラ→オルト-パラ というように段階分けする
→《「私」の死に等価な言葉の像》の立ち上げ

3-b. 宮沢賢治と運命

20/
29

- その先で、吉本は宮沢賢治を特権的対象として論じる。
→紙面上に置かれたテキストに対して、特異な**俯瞰の視点**を立ち上げる存在として……

《作品はじぶんじしんの**運命にたいする他者の表現**をうみだす》

- 「銀河鉄道の夜」における視線
(本来そこから見えるはずのない視線を書く)

非視覚的なイメージ



3-c. 都市を言語表現の装置とする ²¹/₂₉

●「都市のイメージとは」という問いは、「文学におけるイメージとは」という問いから来ている。

そしてそれが〈死からの視線〉をはじめとする特異な経験的質とともに検討され、かつ、様々な分野・対象に向けて展開されていくところに、吉本の特異性がある。

→これを引き継ぐとしたら？

●ex.「移人称」……岡田利規、柴崎友香 etc.

●山下澄人『FICTION』

●清原惟『すべての夜を思いだす』

非視覚的なイメージ



手前側の生への接続

4

特異な〈アトリエ〉を起こす
環境 = 装置としての都市

4-a. ノン・グラフィックな像として

- 近年私は、自身の仕事(表現観)を貫く概念として、
〈アトリエ〉なるものを考えている。
→「アトリエのためのメモ」参照
- 言語表現を、言語そのものではなく、
あくまで紙面の手前側の生をめぐるものとして考える。
(すべてのテキストは、手前側の肉体・生への指示書としてある)
- 複数の環境の掛け合わせとしての魂／思考を、作業場として考える。
さらにそれを、表現によって構成され、表現を通じて伝達・教育される
ものとして捉える。→《ノン・グラフィックな像^{イメージ}》としての〈アトリエ〉
※〈世界視線〉の多重的入れ子状態としての……

4-b. 〈アトリエ〉という空間／素材

24/29

●表現を支え、促し、相互に関係させていく単位＝〈アトリエ〉

〈アトリエ atelier〉という語は本書において、制作者の肉体の置かれた物理的な環境と、制作者が制作に向けて準備し構築し出力していく抽象的な場（体系、マトリクス）を、あえて重ねるかたちで指すものとして運用している。制作者は雑多な日々を過ごしながらも、そこに立ち返りさえすれば制作の蓄積を再起動し、次なる一筆／一語を置きうる。加えてそうした〈アトリエ〉は、制作者を遡行的に把握する上で、その者に制作を強いた（アフォードした）環境として、例えばテキストの構成要素の一つに数え上げられるもの（その高度な単位）でもある。或る肉体は〈アトリエ〉を物理的にも抽象的にも立ち上げることで、様々な中断を挟みながらもなんとか制作を継続し、つどつどの私を掛け合わせ、自身よりも頑健な持続性を構築し、出来上がったテキストに私＝作品を見る。それを受けてまた別の肉体（あるいは異なる時空間の、制作者自身）は、テキストを通じてそれを制作した者を遡行的に仮構し、さらにはその周囲を満たしていた〈アトリエ〉を仮構することで、自らもまた固有の制作を立ち上げる。制作の伝承や共同体の設営を考える時、〈アトリエ〉は具体的な制作行為の技術を超えて、教育されるべき最たるものとしてある。

『新たな距離』

制作／生活への接続

4-c. 都市で〈アトリエ〉を作る

- たとえばオルト・パライメージを〈アトリエ〉として考えたら？
→それをもたらす都市なるものを考えたら？
- 〈アトリエ〉の多重的発生をもたらす装置＝環境としての都市
→孤絶しつつ並列していく私らを発生させていく場
- では、それを用いて(集団で)表現してみる、とは？
(都市について考えるために、というのはもちろんだが、
それ以上に、都市を使って各々が、他のひととともに考えるための
手立て・回路を検討してみたい。)

〈死からの視線〉をつくる 5

都市への接近方法としての〈死からの視線〉

5-a. 仮設計

●都市への接近方法としての〈死からの視線〉

1. みんなで街に出て、一人で立つ。夢のなかに自分がいると想像する。まわりにも人がいるだろうけれど、それらはみんな、別の夢を見ている自分だと考えてみる。
2. まわりを見渡す。どこかハッとするような空間を探し、見つけたら手短かに文章としてメモする。なにかそれに見合う「思い」が思い付かれたら、それもあわせて軽く記す。
3. 同様に探し、メモしてまわる。合計で5つの文を作る。
4. 持ち寄り、みんなで読む。100個の文ができる。
5. 自分以外の95の文から5つ選んで好きな順序に並べ、自分が外に出て書いていたときの感覚を再現しようとしてみる。強引にでもやる。
6. 外に出て、できたテキストをたどり直すように街を歩いてみる。つまりは探す。無くしものを見つけないように。これだというものを見つけたら、しっかり文を読み直し、それを書いている人を想像する。

5-b. 多重的な……

- デジャビュのようでもあり、
- 私を先取りする視線の設計でもあり、
- 夢や幽体離脱の経験のようでもあり、
- 都市がそなえる多重的な空間の表れのようでもあり、
- 都市がそなえる多重的な空間の探索方法のようでもあり、
- 死から見つめられるこの私を作っているようでもあり、
- 特異な〈アトリエ〉をもたらす指示書を都市から制作するようでもあり、
- 都市から離れ、自分の部屋に戻ったとしても思い出される経験の設計でもあり……

→ といったような**集団的「執筆」**方法はあるだろうか？



おわり

質問・問い合わせなどは以下へ

hirozini1220@gmail.com